

# 教育研究業績書

2018年11月21日

所属：日本語日本文学科

資格：講師

氏名：設楽 馨

研究分野	研究内容のキーワード
日本語学、国語教育、言語コミュニケーション	表記、文章・文体、文字テロップ
学位	最終学歴
博士（文学）、修士（学術）、文学士	武庫川女子大学大学院 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. グループワークで作る絵本	2018年2月17日	特別学期の全学プログラムとして、『ミッケ！：いつまでもあそべるかくれんぼ絵本』1992年、小学館にならった絵本作りに取り組んだ。箱に小物を集め、ペアワークでテーマを練って配置し、受講生全員で1冊の絵本に仕上げた。
2. 日本語学入門	2016年4月2018年2月	日本語学を学習・研究するのに必要な基礎的知識を習得し、日常生活に使う日本語に対する様々な観点を、ワークを通して実践する。
3. 日本語学概論	2015年4月1日現在	日本語学を学習・研究するのに必要な基礎的知識を習得し、受講生同士で様々な研究の観点を探るため、ディスカッションしたり調べたことを共有したりする。
4. 児童サービス論	2014年9月現在2017年2月	図書館における児童児童（乳幼児からヤングアダルト）を対象としたサービスの理論と実践を学び、具体的方法と技術の演習まで行う。授業形態として、講義形式もあるが、グループワークによる課題解決を伴う演習を含む。
5. 情報資源組織論	2014年9月現在	図書館における情報資源は人やシステムによって組織化されることで、多くの利用者がアクセスできるようになる。従来の「資料」だけでなく、特定の形にとらわれぬ電子資料やネットワーク情報資源も含めて「どのように情報を組織化するか」について、組織化の意味や世界的状況、目録・分類の基礎的技法について解説する。
6. 情報資源組織演習 I	2014年4月現在	図書館資料における分類の意義について理解を深め、分類記号と件名標目表を作成する技術を習得する。課題に取り組むなかで図書館業務における知識活用の意義や技術を体得してもらう。
7. 日本語ライティング	2014年4月現在	文章読解・作成能力を、段階を踏んで養成し、文章作成に必須となる漢字運用力も習得させる。授業時間で漢字テストや熟語の意味の振り返りを行うことで予習を促すとともに、文章作成と成果披露によって受講生同士の学びあいを促す。
8. 情報資源組織演習 II	2014年4月現在	日本目録規則とMARCレコードについて理解を深め、書誌的事項を記述する技術を習得する。課題に取り組むなかで図書館業務における組織化の意義や技術を体得してもらう。
9. 実践日本文化 - 日本の文字文化 -	2014年2月7日から	日常生活で見る機能美のある文字、風景に溶け込む文字、年季が入っている文字、着飾った文字には、語句の意味にまわりつく、文字の意味がある。そういった視点から、看板等を鑑賞して受講生同士の話し合いを深める。また、自作の句を味のある文字で書き、互いの字の表現を分かち合う。

2 作成した教科書、教材		
1. 生涯学習論 つなぎ広げる学びの循環	2015年11月10日発行	「実践図書館情報学シリーズ」の1冊として「生涯学習」を俯瞰し、生涯学習社会を理解するためのテキスト。
2. 読書で豊かな人間性を育む児童サービス論	2012年09月27日発行	子どもの読書を支援する司書育成のために、児童図書資料について学ぶ一節として「新聞や雑誌を中心とした読書のあり方」を著した。
3. 教師を目指す人のための教育方法・技術論	2012年04月16日発行	教育現場で働くために知っておくべき技術について、「テレビ番組・テレビを活用した教育を理解する」と題した第9章を担当した。

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 高等学校内ガイダンス講師	2017年9月7日	兵庫県伊丹市立伊丹高等学校1年生対象の学部学科分野別（文学）のガイダンスにて文学部のカリキュラム説明や適性、卒業後の就職職種、学生生活全般を説明。
2. 高等学校内模擬授業講師	2016年6月23日	兵庫県立太子高等学校1,2年生対象の学部学科分野別（文学）のガイダンスにて日本文学の専門性を紹介し、模擬授業を実施。
3. 高等学校内ガイダンス講師	2015年7月14日	兵庫県立香寺高等学校1,2年生対象の学部学科分野別（文学）のガイダンスにて日本文学の専門性を紹介し、模擬授業を実施。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
4. 高等学校内ガイダンス講師	2015年7月10日	兵庫県立神戸北高等学校2年生対象の学部学科分野別（文学）のガイダンスにてカリキュラム・進路・適性やオープンキャンパスの見所を説明。
5. 高等学校内模擬授業講師	2015年より6月に実施2016年	兵庫県立太子高等学校1,2年生対象の学部学科分野別（文学）のガイダンスにて日本文学の専門性を紹介し、模擬授業を実施。
6. 高等学校内模擬授業講師	2014年9月17日	兵庫県立西宮北高等学校1年生対象の日本文学・日本語学の模擬授業を実施。
7. 高等学校内模擬授業講師	2014年6月19日	京都文教高等学校2・3年生対象の日本文学・日本語学の模擬授業を実施。
8. 高等学校内ガイダンス講師	2013年6月15日	岡山清心女子高等学校2年生対象の学部学科分野別（文学）のガイダンスにて文学部のカリキュラム説明や模擬授業を実施。
9. 進学説明会講師	2012年7月17日	兵庫県尼崎稲園高等学校2年生対象の学部学科分野別（文学）の説明会に参加。
10. 高等学校内模擬授業講師	2012年12月19日	兵庫県立西宮南高等学校2年生対象の文学（国語）の模擬授業を実施。
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 中学校・高等学校教諭専修（国語）	2007年08月	
2. 中学校・高等学校教諭一種（国語）	2000年03月	
3. 日本語教育主専攻	2000年03月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 武庫川学院教育環境整備戦略委員	2013年4月1日2015年3月31日	学院の教育環境整備を戦略的に進めるために組織された委員会において、各委員や関連部署との協議や書類作成に従事。
2. 女性研究者研究活動支援事業	2012年12月1日2016年3月31日	学内女性研究者の研究支援を追求する事業において、キャリア支援部門サブリーダーとして各種セミナーやサロン提供などに従事。
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 生涯学習論 つなぎ広げる学びの循環	共	2015年11月10日発行	学芸図書株式会社	教職課程や司書課程等で学ぶ生涯学習論のためのテキスト。全13章のうち、第2章生涯学習の対象と手法、第7章公民館、第9章博物館、第11章学習を支援する専門職員の計4章を担当。
2. 児童サービス論	共	2012年9月27日	学芸図書株式会社	図書館司書を目指す大学生向けの、実践図書館情報学シリーズ4として編まれた教科書で「第2章第3節新聞や雑誌を中心とした読書のあり方」の執筆を担当。学校教育に取り入れられる新聞の活用手法や雑誌の商業性に関する指摘など、児童に対して司書が知っておくべき事柄を解説した。（全10ページ）
3. 教師を目指す人のための教育方法・技術論	共	2012年4月16日	学芸図書株式会社	幼稚園から高等学校までの教諭を目指す大学生向けに、実践に基づく教育の方法・技術を示す教科書で「第9章テレビとテレビ番組を活用した教育」の執筆を担当。小学校・中学校を中心とする学校教育において、メディアの具体的な活用方法として放映中のテレビ番組を用いて解説した。（全8ページ）
<b>2 学位論文</b>				
1. パラエティ番組における文字テロップの記述的研究—表記効果の構造分析—	単	2011年11月	武庫川女子大学大学院文学研究科	日常的な言語生活においては、書かれたものを読むことや、話されたことがらを聞くことが同時に行われることがある。視覚と聴覚とで重複して受容する言語情報が生成され、受容されているわけである。本論文はその実態と、その現象が現代日本語表記において及ぼす効果について論究した。研究対象には、地上波で多くの国民に親しまれる日常的なテレビ番組において、表記に関わる観点から「文字テロップ」を扱ったものである。
<b>3 学術論文</b>				
1. 図書館司書課程における新図書館	単	2018年3月31日	京都女子大学図書館司	2017年秋に開館した京都女子大学の新図書館に、ア

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
を活用したアクティブ・ラーニング授業の展開		日発行	書課程研究室	クティブ・ラーニングを促進するエリアが誕生した。学生は、そうした空間、機材、資源によっていかに変化・対応できるのか。アクティブ・ラーニング型の授業課題としてペアワークによる絵本作りに続き、グループワークによる図書館利用案内「新図書館パンフレット」と読書案内「錯視の世界」の作成に取り組み、図書館活用を推進し、新しい活用法を模索する学生の記録から、「滞在型図書館」を考察した。
2. 文字テロップの焦点一修復に着目して一	単	2016年3月31日発行	武庫川女子大学言語文化研究所	地上波で放映されるテレビのバラエティ番組に見る文字テロップの研究は、現状ではその種類や機能について述べたものがある。本稿ではトークショーの修復の談話に着目し、画像や音声情報と文字テロップとを対照していくと、コンテンツのなかで文字テロップが焦点をあてているものが、発言するタレントの配役、ボケ、ツッコミなど話芸の解釈を指定し、談話のコメディ効果を高めていることがわかった。
3. 児童の読書活動とその役割に関する一考察	共	2014年3月	日本語日本文学論叢第九号 (PP. 103~PP. 112)	過去数年にわたって実施してきた、武庫川女子大学学生を対象にした読書活動に関する調査において、文学部日本語日本文学を専攻する、いわゆる「本好き」の学生と、そのほかの学生との比較を検討した。しかし、有意な差は見出せず、司書課程履修者は図書への嗜好が均質的な集団であることが確認された。また、読書と学力の関係を考察した。(設楽馨、平井尊士)
4. 知の拠点としての図書館におけるアクティブラーニングに向けて一 本学附属図書館にて展開すべき「学び」とは一	共	2014年3月	武庫川女子大学紀要人文・社会科学編第60号 (PP. 1~PP. 9)	武庫川女子大学においてアクティブラーニングを推進していくため、新しい学修環境となる附属図書館でどのようなことができ、また、学生はどのようなものを求めているのかを対照し、今後の学修形態を考察した。(設楽馨、平井尊士、川崎安子)(第1節、第3節)
5. 女子大生の実態調査から見るこどもの読書活動支援	単	2013年7月	言語と交流第16号 (PP. 34~PP. 43)	図書館は情報集積の施設であり、集まった情報は多様な利活用がありうる。では、インターネットやパソコンが広まった現代にあって図書館に置かれる司書はどのような役割を果たすべきか。次世代の司書に「メディアファシリテーター」という呼称を与え、その職能を明示すべく、本論は子どもの読書活動支援に特化して考察した。これから司書になろうとする本学学生の実態を踏まえ、子どもが他者と関わる、自己と向き合うために司書が出来ることを提案した。
6. 昔話の現代的価値—一九九〇年代生まれの女子大学生の回答より—	単	2013年3月	日本語日本文学論叢第八号 (PP. 91~PP. 104)	本学で司書課程科目「児童サービス論」を履修する女子大生136人を対象として、昔話31作品に込められた価値観について調査した。その価値観について大まかに次の6点を示した。1 油断禁物、努力と粘り強さで願いは叶う、2 高齢者への敬意を忘れない、3 善行を励行し清貧に生きれば恩恵を得る、4 因果応報だから悪行は慎む、5 相手を許す・相手との約束を守る。
7. 幼少期の読書とその効果—1990年代生まれの女子大学生の場合—	共	2013年3月	武庫川女子大学紀要人文・社会科学編第60号 (PP. 1~PP. 8)	司書課程履修者を対象に、幼少期の読書傾向について調査し、就学前と就学後による違い(識字能力の有無による違い) や就学後の学習進度による違いなどを区別しながら、読書によってどのような効果があったのかを考察した。読書の効果として、図書の魅力を感じる力、図書から学ぶ力、図書の魅力を伝える力の3点を指摘した。(設楽馨、平井尊士)
8. 図書館サービスにおけるコミュニケーション—児童を対象とした場合—	単	2012年12月	武庫川女子大学言語文化研究所年報第23号 (P. 47~PP. 61)	司書課程履修学生が児童に図書推薦の場面を調査し、コミュニケーションの観点から問題点を指摘した。調査は仮想視点を採用し、学生が司書として子どもに童話『アメだまをたべたライオン』を手渡す場面を作文させた。そこでとるコミュニケーションを分析し、子どもに親近感を与えて引き込むオーディエンス・デザインや童話を一般的理解にとどめるのか抽象的理解におよんで推薦するのか等の特徴を見出した。
9. 「読書」に出会う—1990年代生まれの女大学生の場合—	単	2012年07月	言語と交流第15号 (PP. 82~PP. 93)	1990年代生まれの本学学生と読書との関わりを調査した結果から、初めて本を読む行為の記憶について分析し、読書との出会いは養育者との関わりであり、子どもの読書環境の整備には、周囲の大人が子どもと関わり、本を交えて触れあうことが大切であることを確認した。
10. 映像メディアと子どもたち—文字テロップと中学生の言語表現力—	単	2012年03月	日本語日本文学論叢第七号 (PP. 123~PP. 138)	中学校学習指導要領「伝え合う力を高める」点に注目し、テレビに見られる文字テロップに関するアンケート調査の結果から、書く力と文字言語によって表現する力を分析した。表現性を感じるとる力と、表記法として場面によって使い分けるとる力と区別して習得されるものであることを確認し、学力に反映され

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
11. NHKバラエティ番組に見る文字テロップの変遷—テレビにおける表記実態と機能の分化—	単	2012年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第5 9号 (PP. 1~PP. 9)	ることを示唆した。 これまで研究時と同時期に限定された資料のみによる文字テロップ研究が、NHKアーカイブス利用により経年調査を可能とした。そこで、表記内容の変遷を分析することで、科学技術の進歩が文字テロップのデザイン性や演出効果を多様化させ、画像を装飾し、臨場感のある表記内容を持たせて視聴者のテレビに対する関心をひっかけもの（フック）として働くようになった経緯を明らかにした。
12. NHKクイズ番組に見る文字情報の変遷	単	2011年07月	言語と交流第14号 (PP. 90~PP. 103)	クイズ番組に見られる文字情報を経年調査し、表記内容の変遷を追った。初期から一貫して提示されているもの、1980年代から内容が詳しくなって増加したもの、2005年から追加され常態化したもの、というように通時的に分類することで、文字テロップ使用について分析した。結果、文字情報の増加は視聴形態の変化に応じたものと考察した。
13. 「紅白歌合戦」に見る30年間の文字テロップ—1960年代から1980年代まで—	単	2010年11月	武庫川女子大学言語文化研究所年報第21号 (P. 35~PP. 46)	歌番組に被る様々な文字情報の変遷を調べるため、NHK紅白歌合戦のおよそ30年分を調査し、時代背景とともに分析した。結果、番組の枠組みや出演者の情報、歌の情報、勝敗結果が表記されていて、1982年から歌詞が加わっていた。時代背景としてカセットテープやCDによる歌謡曲の浸透、カラオケによる歌詞提示の欲求を検討した。
14. 万葉集 人麻呂歌の「ラ」をめぐる	単	2010年03月	日本語日本文学論叢第五号 (PP. 71~PP. 88)	「彼ら」の「ら」とは何を意味するのか？日本語が表記された当初、『万葉集』における人称を表わす語に付く「ラ」及び、形状言「アカラ」に含まれる「ラ」の使用を検証すると、「ラ」は柿本人麻呂の前後で意味を変化させている。複数を表わさない接尾語「ラ」は、彼より後世の歌では複数を表わすようになることを証明する。
15. テレビ視聴態度と文字テロップ - 学生と成人の対比 -	単	2009年10月	武庫川女子大学言語文化研究所年報第20号 (P. 29~PP. 54)	テレビ視聴では、映像に文字が被って出る「文字テロップ」を目にすることがよくある。この文字テロップについて視聴者がどのような意識を持っているのか質問紙による調査を行なった。分析では、学生と一般成人とで比べた。すると、学生にはテレビ視聴が希薄化する傾向があり、文字による「納得」や「認識」を求める姿が見られた。
16. 万葉集 人麻呂歌に見る「等」—接尾語と、朝鮮経由の漢語と、音仮名について—	単	2009年03月	日本語日本文学論叢第四号 (P. 65~P. 83)	漢字は元来、形、義（意味）、音（読み方）で成り立つ。本稿は『万葉集』人麻呂歌のなかで「等」字を取り出し、その義と音を検証した。すると、漢字が朝鮮経由で中国から移入されたことを裏付けるような義のほか、いくつかの用法が見られた。そこで「等」が朝鮮語における「類」の義と、それまでの日本語にあった接尾語や音としての「ラ」と交わり合って日本固有の「等」という日本語を形成した、と考えた。
17. テレビのトークコーナーを読む—同一の発話を伴わない文字テロップの実態—	単	2008年02月	武庫川女子大学言語文化研究所年報第18号 (P. 37~PP. 61)	テレビのトークコーナーに出現する文字テロップには、出演者の発話に従って表記内容を変えるものの、発話と同じ内容ではない文字テロップが見られる番組がある。そうした番組から収集した実例をもとに、表記内容の実態を記述し、発話と同一でない文字テロップでは、状況に応じて表記者の立場を即時的に変える特徴を指摘する。
18. 『繪入開化往来』 解題	共	2007年03月	地域文化研究叢書2 『繪入開化往来』 (PP. 113~PP. 119)	武庫川女子大学が所蔵する『繪入開化往来』について、書誌、諸本の種類、内容、口絵を考察した。題の通り、本文の上段に挿絵があり、著者は主にこの挿絵の一覧表作成に関わった。挿絵には対象について漢字表記とカナ表記が付され、俗名や簡略な注を添えている。これらを整理し、挿絵一覧表を作成した。（辻 博光、設楽馨）（表）
19. ナレーションの文字テロップ	単	2006年12月	武庫川女子大学 言語文化研究所年報第17号 (P. 13~P. 28)	最近のテレビには、数多くの文字情報が画像に出現し、視聴者に「読む」という意識はなくとも、読まされているのが現状ではないだろうか。本論では、バラエティ番組に出現する、ナレーションに伴う文字テロップに注目し、文字テロップの表記内容について、ナレーション（音声情報）との対応から分類および分析し、その多くは要約になっていることを明らかにした。
20. バラエティ番組35種における文字テロップ	単	2005年12月	かほよとり第13号 (PP. 72~PP. 82)	「ながらのテレビ視聴」とともに、テレビは多くの文字テロップが付加されるようになってきている。この文字テロップの出現するバラエティ番組を35種にわたって取り上げ、番組内容によって分類したジャンル（トークや情報、ドキュメンタリーなど）を設定し、ジャンル別に文字テロップの表現内容を記述し、傾向を考察した。
21. 発話状況を再現する文字テロップ	単	2005年09月	教師づくり教材づくり 日本語教育—河原崎幹	テレビのトークコーナーに出現する文字テロップについて、一般的な文献資料とは異なる文字の振る舞

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
			夫先生古稀記念論文集 一 (PP. 24~PP. 35)	いを考察した。それは、話し言葉を写したような表現スタイルであり、発話の場面を再現していることを指摘した。こうした発話状況の再現が持つ効果として、受容者となる視聴者の受容態度にも触れ、考察を加えた。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. テレビのバラエティ番組における文字テロップ発信する主体の複数性一	共	2010年03月	社会言語科学会第25回大会発表 (慶應義塾大学)	シンポジウム「メディア・ディスコースにおけるマルチモーダル・コミュニケーション」のテレビにおける場合として発表を担当した。テレビは発信のみの一方通行的なメディアであるにも関わらず、その表記主体に複数性を持たせることで視聴者と一体化するような受容態度を形成する場面がある。そうした複数性と表現の多様性を読み解くと、書き手(番組制作者)の解釈によって視聴者による解釈の幅が限定されることがある、という事実を提示した。(設楽馨、佐藤彰)
<b>2. 学会発表</b>				
1. TAEを応用して記憶を見つけ、画像で表現する	単	2018年3月1日	第4回TAE質的研究シンポジウム	司書課程科目において絵本作りを実践するなかで、絵本のテーマには制作者の記憶が埋め込まれることがわかった。そこでTAEを応用して、テーマを意識的に上らせて、イメージを明確化することで作品性を豊かにする授業実践を報告した。
2. 「司書課程における図書館サービスのための教育-アクティブ・ラーニング教育はどの程度必要あるいは可能なのか-	共	2015年9月27日	情報コミュニケーション学会第17回研究会	本学教育環境整備により、アクティブラーニングを促進する教室が充足した。その状況を示すとともに、当該環境で必要とされる、あるいは実現可能なアクティブラーニングを整理するため、司書課程科目において検討を加えた。共著の分担として、アクティブラーニングを実現している科目のひとつ「児童サービス論」についての実践例を発表した。平井尊士、設楽馨。
3. 児童のメディアコミュニケーション向上のための女子大生による絵本サイトの選択と解釈、その変化要因	共	2013年2月23日	情報コミュニケーション学会第10回全国大会 (武庫川女子大学)	児童の読書力やコミュニケーション能力向上のために、絵本は重要な役割を担う。情報発展技術のなかでデジタル絵本が広まっているが、子どもに役立つデジタル絵本について簡易な調査を実施し、その結果を報告した。デジタル絵本は文章化された内容の解釈によって選択され、解釈は選択者の価値観に左右され、価値観は時事情報で揺れ動くことを指摘した。設楽馨、平井尊士
4. ことばや ~ことば いりませんか?~	単	2013年10月12日	NIK日本語研究会杏園祭特別研究発表会 (杏林大学)	日本語学および日本語教育を勉強する大学院生に、大学教員としてできることや研究者として考えていることなど、これまでの教育研究歴に基づいて概説した。 日本語学および日本語教育を勉強する大学院生に、これまでの教育研究歴に基づいて今後の研究課題を概説した。 ことばがコミュニケーションの手段として音声と文字の両方を使用する事例に、テレビの文字テロップがある。これは文字だけ、あるいは音声だけよりも、伝達確実性や情報量・解釈を書き手の側が操作しやすい。この背景を探る中で、書き手と読み手が前提とする(あるいは共有する)情報量や伝達手段の整合性を探ることが重要だと考えた。
5. 武庫川女子大学附属図書館におけるアクティブラーニングの試み: 管理主体からサービス主体の図書館への変革を目指して	共	2013年10月06日	情報コミュニケーション学会第11回研究会 (長崎大学)	文部科学省が図書館を軸に推奨する、教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションとして、アクティブラーニングが注目される。そこで、アクティブラーニングの現状を示し、次年度から本格的に始動する本学での事例を説明した。そして、図書館変革と学びのコミュニケーションの展開について考察した。
6. TAEワークブックを用いた文章表現法の教育的効果について-2012年度文系女子短期大学部生の場合-	単	2012年12月9日	第1回TAE質的研究国際シンポジウム 研究発表 (宮崎大学)	Thinking At the Edge (TAE) は2004年にユージン・ジェンドリンと夫人メアリーによって開発された概念生成法で、近年、教育や心理、看護等の対人支援に関わる領域で重要視されている。発表者はTAEによる文章表現ワークブックを短期大学部の授業で実践した事例から、学生が作成した文章を評価するなかで、TAEがもたらす教育的効果の観点を提出した。
7. 現代日本語表記に見る終助詞使用 (文字テロップの場合)	単	2011年08月	第十回世界日本語教育研究大会 ポスター発表 (天津外語大学)	現代日本語表記の一種に、テレビのバラエティ番組に被る文字テロップがある。なかでもバラエティ番組のトークショーでは、出演者の発話内容を表記した文字テロップが並び、話し手の態度やコミュニケーションの姿を表記している。発表では、文字テロップに表記された終助詞「よ」「ね」「よね」に着目することで、文字テロップを日本語接触場面とするときの問題点および利点を指摘した。
8. 文字テロップと視聴者意識	単	2009年12月	第28回メディアとこと	テレビ画像に被せられた文字情報「文字テロップ」

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
9. 文字テロップにおけるバラエティ性とドキュメンタリー性の比較	単	2008年09月	ば研究会（武庫川女子大学）  計量国語学会第五十二回大会（武庫川女子大学）	に関する約700名の視聴者アンケートの結果を報告する。さらに、文字テロップの実例をいくつか取り上げるなかで、声を視覚化することや、トークに生じる発話者たちの共有感覚を文字化するという、文字テロップの役割を考察する。  文字テロップとはテレビで映像に被せた文字情報を指す。この文字テロップは、ナレーションが挿入される場面ではナレーションの要約と言える内容でとても短い。けれど番組によって特徴的なスタイルを持つ。語数や名詞、符号を計量的に扱うことで、ドキュメンタリー性を客観的な情報提示、またバラエティ性を主観的な説明と結論付けた。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. ネーミングのコトバ学	共	2018年2月16日	武庫川女子大学言語文化研究所	昨年に引き続き、地名のネーミング、名前の正しさといった講座の後、日本語のキャラクター（ドラえもん・ポケットモンスター）のネーミングについてコメンテーターとして解説。
2. ネーミングのコトバ学	共	2017年2月18日	武庫川女子大学言語文化研究所	外国文学作品、人気ブログ、人名のネーミングについてのシンポジウムにおいて、コメンテーターとして参加。
3. NHKアーカイブス学術利用トライアル研究第2期において採用された。NHKバラエティ番組を視聴し、表記実態と文字情報の機能について考察する。		2010年		
<b>6. 研究費の取得状況</b>				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2014年6月1日2018年3月31日	さくらFM株式会社番組審議会委員
2. 2011年1月から現在	言語と交流研究会
3. 2009年3月から現在	社会言語科学会
4. 2008年4月から現在	計量国語学会
5. 2007年6月から現在	メディアとことば研究会